

■中川専蔵・専之助（中川家略系図参照）



駿河における蒔絵の転換期は天嶺とその後の小林留吉、遷次郎との出会いから始まった。中川専蔵の父亀蔵が、旅行中信州飯田の画家天嶺と知り合う。後に天嶺は亀蔵の家を訪れ、長男文蔵には絵画を、その弟専蔵には研出蒔絵の技術を教えた。

天嶺は駿府滞在中、高蒔絵錆上の額、長さ一尺五寸、巾一尺で牡丹獅子、玉眼入の画四枚を製作し、技術伝授後帰国した。

駿河の蒔絵は、それまで単に、諸器具に紋どころを施したり、幕府御用筆筥、長持に唐草を描くに過ぎなかったが、これより広く花鳥草木等の蒔絵が描かれるようになった。

天保元年（1830）江戸より小林留吉、遷次郎（号東子齋）が駿府に来て、中川専蔵の家に滞在。のち江川町に住みついた。同町砂張屋の製品に描金するとともに、その技を多くの子弟に伝習した。

両氏から伝習を受けた者は、中川半助（上石町一丁目）、中川専之助（本通四丁目）、中川専蔵（本通八丁目）深江屋幸（深井幸太郎、呉服町五丁目）、藤伝（鍛冶町）下山茂司等で、これにより静岡蒔絵の流派を、中川派、深幸派、藤伝派、下山派の四流といわれるようになった。（蒔絵の流派参照）

小林遷次郎の碑は葵区春日町安立寺境内にある。

また、音羽山清水寺境内にある中川仙翁（専蔵の号）の碑を見ると、天嶺と小林留吉、遷次郎の三名が漆器製作の技術発展に力を尽くしたことが知れる。

因みに、静岡県が譲り受けた徳川慶喜公直系の孫高松宮妃殿下御所蔵の雛人形・雛具のうち蒔絵については、中川専蔵が描いたものである。